★倉橋賞受賞論文★

フレーベルの第一恩物を原点とした玩具と乳児の発達段階とのかかわり合いの一考察

川田芳子
大磯喜久子
永吉和子
竹中良子
前川富美子

そのⅠ

目的

フレーベルは、子どもに与える最初の玩具は最も単純なもので且つ最も多様性を含むものであり、基本的なものの中に創造性を欠くことのできない要素を含んでいる形態として球形を選んでいる。

また、彼は神のように創造する能力の芽生えは、生れたばかりの子どもに与えられているとし、球によって外的内的刺激を受け、成長発達すると教えている。

私たちは「フレーベルの第一恩物」である「六球」を保育にとり入れ、まりの特性を生かした遊びを主体にして、乳児の心身の発達過程の反応を観察してみた。

方法・反応

赤、黄、青の三色のひもつきとひもなしまりを使用し、対象は

生後四十五日から満一歳二ヶ月児とした。

◎**左右上下に動かす**（ひもつきまり）

まりを静止させた状態でひもを左右に移動させると、生後一、二ヶ月頃の乳児はまりの方へ視線を向け、わずか数秒間であるが動きを目で追い、時にはかすかなほほえみをうかべる姿がみられる。

二、三ヶ月頃には語りかける保育者の顔とまりを交互に眺め、物体の存在を確かめているようであり、まりをさげて手に触れさすと一瞬「ビクッ」と反射的に手を動かしている。三ヶ月過ぎる頃には盛んに手足を動かし、物体の確認を更に深めたい気持を全身で表現している。

五ヶ月頃にはまりから視線を離さず、近づいてくることを期待するかの如く全指を広げ、触れることによって満足感を充たし、動くまりを手足を動かして追い求める姿の中に、時間的、空間的観念の芽生えを感じさせる。

また、まりからひもに視線を移し、更にひもを持っている保育者を確認するかのように笑顔がみられ、逆に保育者からひも、まりへと移す場合もあり、殆んどの乳児がこの時期に同じ反応を示している。

ここに乳児と保育者を結びつけるまりであることが明確に表現されている。

座っている乳児の前に、まりを上から落すように床につけると、何度も見せているうちに落ちるのを期待して視線を上にあげ「ドスン」という言葉に声をたてて笑っている姿がみられ、ここにも時間的感覚としてのまりをとらえているようである。

やがて、這う時期になると自分で動かそうとする活動が目覚め、まりを出すとすぐ寄ってくるようになる。

◎**左右前後にゆり動かす**（ひもつき）

この遊びの反応は四ヶ月頃までは先に述べた「動かす」と殆んど変らない。

五ヶ月頃になると、ゆれるまりに手をのばして触れようとするがうまく握れず、一段と大ゆれしたり、回転したりし、叩くようにまりを追い、自分で動かす意図的行為がみられ、自発活動の一片がうかがわれる。

また、両手ではさむように握ったり、引っぱったり、口に持っていき、触覚を通してまりの性質を感知しているようである。

八ヶ月頃には、動くまりをつかまえ、保育者がかるくひもを引き上げると、最初はすりぬけていたが、次第に手から逃がさないようにひものついている部分を握ることをおぼえ、強く引いてもはずれず、ひもを上げ下げすると、乳児の腕が上下し、保育者と

の強いつながりを確認しているかの如く笑顔をみせ、活動性を満足させる大好きな遊びである。

◎**上下に振る**（ひもつきまり）

この遊びは、まりの動きが速くなり、リズミカルな動きをする。

目の高さでまりを振ると、動きに合わせて小きざみに首を振ったり、両手を羽ばたくように動かしたり、身体を左右にゆすったり、遊戯への芽生えがみられる。

そして保育者が持っているひもに興味を示し、いっしょに振る真似をし、持たせるとでたらめな振り方をするが、自分もまりと一体になって身体で拍子をとっている。

一歳頃には、保育者の歌や語りかけといっしょに上手に振るようになり、模倣遊びとしてのまりの与え方が考えられる。

蝶々、犬、かえる、等の生き物の動きをすることによって乳児の目は輝やき、実物が存在するかのように好奇心に満ちた表情をみせている。

◎**空中、床でまわす**（ひもつきまり）

この遊びは、更に速度が早くなり、少し離れてみると大きい円を描いており、驚きや不可思議な表情でしばらくの間身動きもせず、まりの動きに見入っており、空間的、美的感覚としてのまりを見ているようである。

◎**床で左右にゆする・ひっぱる**（ひもつき）

まりの動きは生物としての動きが感じられ這い這いの時期に興味をもつ遊びである。

目の前でまりを引っぱると、手足に力を入れて取ろうとする自発活動がみられ、ひもを引っぱることによって這い這いへの意欲を必然的に持たせることが可能になり、まりをつかまえると離さないようにかかえこみ、満足感を味わっている。

◎**ふり上げてたたく**（ひもつきまり）

保育者と向かい合ってまりのひもを持ち、ふり上げて模倣しようとするが、自分の体にまりがはね返り、反動で反対方向に回転する肩たたきの遊びを自ら考えてしている。

その他、ひもが輪になっていることに気付き、両指を引っかけて振るとまりが回転する遊びや、輪の中に腕を通したり、頭を入れようとする遊びを乳児自身が発見し、無限の可能性を感じさせる場面が遊びの中でしばしば見られる。

乳児が次第に成長発達し、自分で物に触れたり取りに行こうとする身体運動が盛んになってくると、その発達を助長するための遊びとして、ひもなしまりが適してくる。

◎**握る・たたく・丸める**（ひもなし）

乳児の前に三色のまりを置くと、赤に視線がいき、握って遊ぶのは手近にあるまりを選んでいる。

そして口にくわえたり、床にたたきつけたりしてまりの形や性質を感知している。

一歳頃には二個のまりを持って両ほほに当てたり、打ち合わせたりし、保育者がもう一個のまりを出すと片方のまりを口にくわえて三個目を持ったり、両足でかかえこむようなしぐさがみられ、数的観念の芽生えを感じさせる。

また、色にも関心を持ち、保育者と同じ色のまりを選んだり、ころがっていったまりを追いかけて保育者のところへ持ってくるようになる。

やがては自分で目的の方向に投げるようになり、歩行完成の時期には自由に拾ったり、投げたりの自発活動がみられる。

このひもなしまりの「ころがす・投げる」の遊びは「小ボール」として次のそのⅡで紹介する。

結果・考察

以上第一恩物の遊びの一例を紹介したが、まりの遊びの多様性が測り知れないほどあることが推察できる。

フレーベルは赤いまりを毎日くり返して見せているうちに、動くものに興味を感じ手をのばして触れようと努力し、触れれば握ろうとして握って放せば動き、自分の力でまりを動かすようになり、反復しているうちに触覚を通してその物体を感知するようになると述べている。

私たちは、まりの遊びを通して確認し、第一恩物が球形であることの意義が理解され、即ち自然界と人間の理想としての球形であり、生れて間もない乳児が母親の胸からやがて離れて自立していく過程は、ひもつきまりからひもなしまりへと移行していく過程の中に明らかにうかがわれる。

親と子を結ぶ最初の玩具がまりであるならば、人間と宇宙、つまり自然とのつながりのひもであり、宇宙の創造者である神と人間を結ぶひもではないだろうか。

参考文献　荘司雅子著『フレーベルの教育学』

そのⅡ

目的

私たちの乳児保育の中で、欠くことのできない素材である玩具

の大部分が大小の球を形どっていることに着眼し、第一恩物を基本にした遊びを実際に取り入れ、玩具とのかかわり合いの反応を観察し、乳児の心身の発達を助長する保育を習得したいと思う。

方法・反応

保育者と乳児の毎日のふれ合いの保育の中で観察し、対象は二ケ月児より満一歳二ケ月児とした。

生後一ケ月～二ケ月　一日の大半を眠ってすごし、目覚めている時に、音、明るさ、動くものにかすかに反応を示し、保育者が笑顔で語りかけると、じっと見てほほえむ。

抱き上げると保育者の胸に頬を寄せ、母親の乳房をまさぐるように口でさがし求めるしぐさをする。

この時、人工乳児はこのしぐさが少ないのでマザーリングの必要さを感じ、保育者の頬や手をもって愛撫しなければならないと思う。即ち、球のやわらかさを肌に感じさせるようにする。

生後三ケ月～四ケ月　指しゃぶりや、自分の指を広げたり、握ったりして眺め、身近にあるものに触れようとしている。

この時期は、オルゴールメリーのような吊り玩具を好み、やわらかい音や、暖かさを感じさせる明るい色に目を向け、笑ったり、喃語を発して手や足を動かしている姿が見られる。また、指しゃぶりの時期なので、おしゃぶりや、ガラガラが適しており、持たせると口に持っていこうとする（吸うという条件反射）その上、人がいるという意識が出てくるので保育者が側にいくと、嬉しそうに手足をばたつかせ、抱き上げると安心したような表情を示し、この感情が充分に満たされることによって、指しゃぶりの時期を脱皮するよう配慮しなければならないと思う。

ここにも球のやわらかさとの関連があると思う。

生後四ケ月～五ケ月　この頃になると上体がしっかりし、腹這いや両腕で支えて頭を起こしている。

立体感や距離感も出てきて、保育者がガラガラを振ると、じっと見つめ、自分から手をのばして触れようとする。

とどかないと怒りの表情で泣き、側へ持っていくと泣き止み、感情の表現が少しずつ多様化していくようである。

起き上りこぼしを自分で動かし、音を楽しんでいるが、力が入り過ぎて大ゆれになると、驚いたように泣く姿もみられ、保育者は不快を取りのぞくよう少しの間ひざに抱いたり、玩具を納得するまで握らせたりして、乳児の要求を満たすようにしたい。

生後六ケ月～七ケ月　少しの間座ることができ、保育者が離れると不安そうに目で追い、人見知りが始まる。

この時期に天井から吊したビーチボールを与えると、腹這いや

仰向けになって、叩いたり、蹴ったり、両足を持ち上げて抱えこむようにし、球としての感触を存分に楽しんでいる場面がみられる。

この人見知りする不安定な時期に、心のふれ合いを大切にし、強く抱きしめることによって相互の信頼感が生れてくるのではないだろうか。

また、少し遠くの物も目に入るようになり、移動玩具を動かすと目で追い、身体を一時静止させて玩具に集中し、興味への持続時間が長くなってくる。

しかし必要以上の刺激を与えることによって感情の高ぶりが見られ情緒安定を阻害する恐れがある。

乳児には落付いたふんいきの中で生活するよう心がけなければならないと思う。

生後八ケ月～九ケ月　這うことが自由になり、一人でお座りができる。また簡単な模倣もできる。

この時期は、物の形を知らせる玩具として、ボール、積木等がある。

保育者が積木を重ねて見せると、触れてこわしていたが、やがて上の積木を取ってみたり自分で重ねようとする姿がみられ、知的発達の芽生えを感じさせる。

その他、生活用玩具を好み、保育者がコップで飲む動作をしながら言葉かけをすると、一緒に動作をして嬉しそうに何度も要求をし、人との接触を進んで求めるようになる。

球形から円筒、立方体へと遊びの中で、第二恩物の形体が自然に取り入れられるよう配慮し、遊びを充分に満たすよう心がけたい。

生後十ケ月～十二ケ月　つかまり立ちからつたい歩きができ、一時期、玩具から離れて一人で歩行練習に熱中している姿がみられる。保育者はその期間を見守り、歩行完成への到達を助長するような遊びを考えたい。

同時に言葉の理解と意味のある単語を発するようになり、破壊的であった遊びから思考力が生れ、構成しようとする知能の芽生えが明確になってくるようである。

天井から吊したビーチボールはこの時期にも適しており、保育者の肩につかまって片手で叩いたり、両手で抱えこむような動作を繰り返している。

また玩具の中から組み合わせられるものを自分で選び、得意顔で見せ、保育者の誉め言葉を待っている。また組み合わさらないものも試してみようとし、笑いをそそる場面が多々見られ、知的発達を促す玩具を与えたい。

生後十三ヶ月～十四ヶ月　一人歩きができ、歩行がしっかりしてくると、小ボールを自分で投げては拾いに行き、目的をもって遊ぶようになる。

歩き始めた頃の乳児が立っているところへ大・中・小のボールをころがすと小ボールを拾っている。すでに大きさの比較ができており、小ボールは握りやすく、バランスをとる為に支障がないことを乳児自身が把握している。歩行が完成すると、吊りピーチボールをはずし、保育者ところがしたり、投げ合ったり、一人で抱えて歩いたりする。

他の子が自分と違う色のボールを持っていると、自分のを捨てて取り上げようとする。また、交換してほしい意志表示をする。

ここに、保育者の仲介なしで、子ども同志のふれ合いがみられ、友だち意識を感じさせる場面である。

また、全身を使って遊ぶことのできる大型ブロックも喜び、同色、同形のブロックをより分けたり、友だちと同じ物を欲しがり、取り合になる姿もみられ、一人遊びから集団遊びへの意識が芽生え、危険のないよう見守る姿勢が保育者として大切であると思う。

結果・考察

以上の遊びは恩物を原点とした遊びの応用であるが、最初の皮膚感覚から目、耳、口、手足、身体を動かす全身遊びに発展し、更に活動範囲が広がって歩行完成に到達する過程が遊びを通して感じられる。

知的発達においても、明るさから色感、感触から形、数、振ったり投げたりすることによって方向、重さを感知できるよう導くことができる。

しかし、既成玩具は遊びが制限され、発達段階に適さないと危険をともない破壊衝動をおこす玩具になってしまう場合があるので、保育者は取捨選択し、手作り玩具を考案し、発達に即した玩具や遊びを取り入れなければならないと思う。

恩物は、発達に応じた無限の遊びが可能であり、自発性を促し、心身発達の助成をなしている。

私たちは、玩具の原点である第一恩物を再確認し、乳児の中に眠っている無限の能力を導き出すべく努力が保育者としての使命だと思う。

（社会福祉法人イエス団　坂出育愛館）